

イチゴ新品種 ‘きらび香(仮称)’ の育成経過と主特性

河田智明¹⁾・竹内隆¹⁾・井狩徹¹⁾・望月麻衣¹⁾・大石智広²⁾・
済木千恵子³⁾・池ヶ谷篤⁴⁾・五藤由香理⁵⁾

¹⁾農林技術研究所本所, ²⁾経済産業部農林業局農業振興課, ³⁾くらし・環境部管理局政策監付
⁴⁾工業技術研究所, ⁵⁾経済産業部振興局マーケティング推進課

Pedigree and Characteristics of a New Strawberry Cultivar, 'Kirapika'

Tomoaki Kawata¹⁾, Takashi Takeuchi¹⁾, Toru Ikari¹⁾, Mai Mochizuki¹⁾,
Tomohiro Oishi²⁾, Chieko Saiki³⁾, Atsushi Ikegaya⁴⁾ and Yukari Goto⁵⁾

¹⁾Shizuoka Res. Inst. Agric. and For., ²⁾Agri. Promo. Div.,

³⁾Community and Environmental Affairs Strategic Div.,

⁴⁾Shizuoka Res. Inst. of Industrial, ⁵⁾Marketing Promo. Div.

Abstract

The strawberry breeding lines '05-2-5' and 'Shizuoka No.13' were crossed to breed new cultivars with characteristics such as high yield, favorable taste, texture suitable for transport and preservation, and compatibility with various cropping type. The new breeding line, 'Shizuoka No.15' was selected and named 'Kirapika' for cultivar registration. The characteristics of the cultivar are as follows.

1. The time of flower bud initiation is earlier than that of 'Benihoppe', but the secondary and tertiary fruit clusters are formed continuously.
2. Plant growth is vigorous, and the color of the leaf is dark.
3. The yield of the cultivar is equivalent to that of 'Benihoppe'.
4. The fruit texture is as firm as that of 'Benihoppe' with excellent brilliance. The fruit shows a high sugar content and acidity between 'Benihoppe' and 'Akihime' with a favorable taste and aroma.
5. The average fruit size is as large as that of 'Benihoppe', but large fruits are liable to develop into irregular shape.
6. The cultivar is as susceptible as 'Benihoppe' to anthracnose and powdery mildew.

I 緒 言

静岡県のイチゴは、栽培面積 320ha、生産量 11,500 t⁷⁾、産出額 108 億円⁸⁾ (2013 年) と、本県の野菜の中で最も産出額が多い重要な品目である。栽培面積はやや減少傾向にあるが、‘紅ほっぺ’の導入及び消費宣伝等によるブランドの確立等により、生産量、産出額は、ほぼ横ばいで推移している。2013 年の調査によると、生産者 1 戸当たりの平均栽培面積は 18.3 a と 2004 年調査の 16.8 a か

ら微増しているものの、15 a 未満の生産者が約半数を占める。また、イチゴ専業で持続的経営が成立すると考えられる 40a 以上の生産者は、48 戸から 71 戸に増加しているものの、未だその数は少ない。この規模拡大を阻害する要因として、優良農地の確保、定植時期や収穫時期の作業労力の集中等が考えられている。

また、本県における作付け品種は‘章姫’ (1992 年品種登録) が中心であったが (1998 年産で 8 割強)、2006 年から当所育成の‘紅ほっぺ’ (2002 年品種登録)⁹⁾ が本格的に普及し、2008 年以降は‘紅ほっぺ’の作付け割

合が8割以上となっている。栽培しやすく多収性である‘紅ほっぺ’は、果実が硬く、果実の中まで赤く、ブドウ様の香りと濃厚な食味を持ち、京浜市場の単価が2位[†]と市場評価も高く、確固たるブランドを形成している。しかし、‘紅ほっぺ’は早生であるが、収穫開始時期がやや遅い、頂花房収穫終了から第一次腋花房収穫開始までに中休みが生じる、収穫量の時期による差が大きい、春先の完熟果で果皮が傷みやすい、等の問題が指摘されている。

筆者らは、静岡県の気象条件に適し、経営規模拡大の重要な条件となる省力で多様な作型に対応可能で、極早生性及び連続出蕾性を備え、高収量性、優良品質(良食味、輸送性)等の形質を併せもつことを育種目標に交配、選抜を重ねてきた。その中で、ほぼ育種目標を満たす‘きらび香’を育成したので、その育成経過と主要な品種特性について報告する。

II 育成経過

‘紅ほっぺ’の育成以降、優良な形質を併せ持つ近親系統同士の交配を主体として、優良遺伝子の集積を図ってきた。その中で‘きらび香’は、1996年以降9回の交配を積み重ね、累計28万株の中から選抜した(図1)。

2009年3月に、果実の硬さに優れ、極めて良食味である等果実品質に優れる静岡県農林技術研究所育成系統‘05-2-5’を種子親に、極早生性、連続出蕾性に優れ、果実が硬く良食味な同所育成系統‘静岡13号’を花粉親として交配した。

同年4月に交配種子をは種し、9月に生育旺盛な750個体を定植した。この中から草勢、大果性、形状、硬さ、食味、色沢等の主形質について良否を考慮し、10個体を選抜した。

2010年度は、選抜した10個体を系統として実生2年

次の選抜を行い、2011年4月に極早生性、連続出蕾性、収量性、食味、果実の硬さ、光沢、大果性等に優れた1系統‘09-2-8’を選抜した。

2011年度は、選抜した‘09-2-8’について、実生3年次の選抜を行った。

2012年度は、他の有望育成系統2系統(‘08-2-6’、‘10-3-7’)を併せた3系統を供試し、4年次系統選抜及び高設栽培適性試験を行った。その結果、‘09-2-8’は極早生、連続出蕾性、‘紅ほっぺ’と同等以上の多収性を有し、食味が良好で、硬く、光沢がある等の特長を備えていることから、生産者、市場仲卸、消費者の意見も参考にして、‘09-2-8’を選抜し、2013年7月に系統名‘静岡15号’を付与した。

2013年度は、所内での特性検定のほか、伊豆の国市、焼津市、掛川市の3市5ほ場において、現地適応性試験を実施した。その結果、果房第1果の変形が激しいこと、果房第1果の果梗が短く、頂部軟質果や灰色かび病が発生し易いこと、厳寒期に成熟日数が長くなると裂皮が発生すること、等の特性についての問題が指摘された。

しかし、‘紅ほっぺ’より早生で連続出蕾性に優れ、‘紅ほっぺ’と同等以上の収量性と大果性及び果実の硬さを有し、果実に光沢があり外観品質が良好であること、酸味が‘紅ほっぺ’より低く、食味が良好であることが確認され、有望であると認められたので、2014年8月に‘きらび香’という名称で品種登録出願をし、2015年1月に出願公表された。

‘きらび香’の名称は、静岡県経済産業部農林業局みかん園芸課主導で2013年6月に設立した、生産者、農業団体、行政機関等からなる「静岡いちご戦略協議会」の下部組織であるブランド戦略部会において、静岡県立大学及び当研究所の調査結果をもとに新品种のイメージを抽出、キャッチコピーを決定し、名称公募を経て決定された。‘きらび香’という名称は、外観がきらびやかで、甘くフルーティな香りを持つ様子をあらわしている。

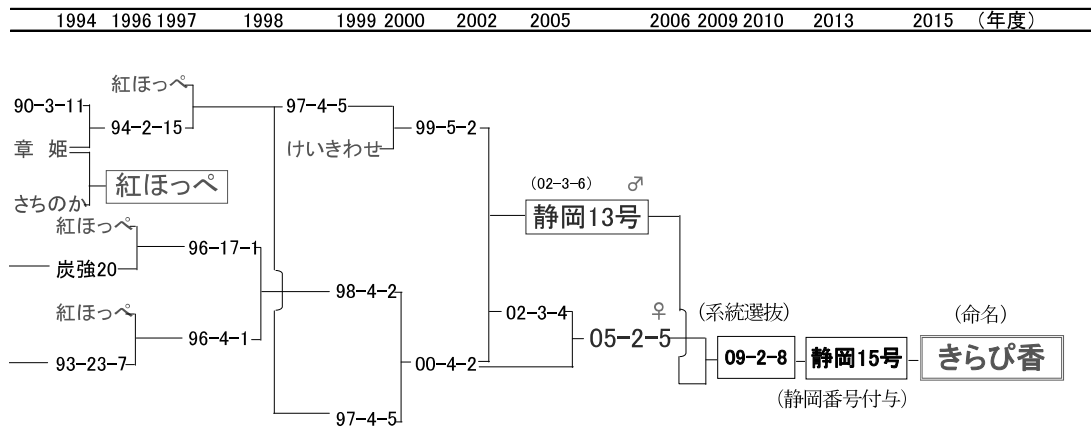


図1 ‘きらび香’の系譜

[†] 平成26年産静岡県経済農業協同組合連合会資料

Ⅲ 品種特性

1 品種特性把握のための栽培・調査方法

‘紅ほっぺ’及び‘章姫’を対照品種として、2011年度から2013年度にかけての3作で‘きらび香’の特性調査を行った。調査は所内ガラス温室において土耕栽培で行い、1区16株3反復とし、当所慣行管理に従って栽培した。

2 生育特性

草姿は立性で、草勢は‘紅ほっぺ’よりやや弱いものの強く、葉柄長は‘紅ほっぺ’より短く(表1)、草丈も‘紅ほっぺ’より低い。所内試験と現地試験の観察から、ランナーの発生は‘紅ほっぺ’より遅く、また、やや少ない傾向であるが、4月上旬までに定植することで必要量は確保できると考えられる(表2)。葉は‘紅ほっぺ’と同程度に大きく、葉色は‘紅ほっぺ’より濃い。

収穫初期の生育について、草丈は‘紅ほっぺ’よりやや低く、葉の大きさは‘紅ほっぺ’と同程度である。第一次腋芽の発生は‘紅ほっぺ’より少なく、ほぼ1芽であり、芽の整理の労力はかからない(表3)。土中のクラウン腋から発生する休眠芽の発生もみられる。

表1 形態特性¹⁾

形質	きらび香	紅ほっぺ	章姫
草姿	立性	立性	立性
草勢	強	かなり強	かなり強
葉柄の長さ	中	長	長
葉の大きさ	大	大	大
分げつの多少	少	中	少
ランナーの数	やや少	中	中
葉の表面の色	濃緑	濃緑	濃緑

1) 品種登録出願に係るいちご属審査基準による

表2 ランナー発生特性¹⁾

年度	2013	2014
親株定植日	4/2	4/3
調査日	6/14	6/12
きらび香	12.7	15.8
紅ほっぺ	17.3	15.8
章姫	17.6	22.2

1) 親株1株当たりのランナー発生本数。親株は7号鉢に定植

表3 収穫初期の生育¹⁾

	展開第3葉		頂花房		第一次腋芽数
	葉面積 (cm ²)	葉柄長 (cm)	分枝数 (本)	花数 (花)	
きらび香	203	21.5	2.1	17.1	1.1
紅ほっぺ	223	23.4	2.8	20.6	1.4
章姫	214	23.5	2.9	40.6	1.1

1) 2011, 2012, 2013年度の平均

ポット育苗による切り離し時や定植時の根の様子をみると、根量は‘紅ほっぺ’と同等かやや少なく、‘紅ほっぺ’より細根が少ない傾向がみられた(図2)。



図2 根の様子
紅ほっぺ きらび香 紅ほっぺ きらび香
切り離し時 (2012.7.18) 定植時 (2012.9.13)

図2 根の様子

3 花芽分化・開花・成熟特性

図3に2012年度と2013年度の花芽分化・発達状況について示した。2012年度は花芽分化が早く、分化期となるのが‘紅ほっぺ’より12日程度、‘章姫’より10日程度早かった。一方、2013年度は花芽分化が遅く、分化期となるのが‘紅ほっぺ’よりやや早い程度であった。2011年度から2015年度までの様子を見ると、分化期となるのが‘紅ほっぺ’より8~12日早く、‘章姫’より2~6日早いと考えられる。

2011年度から2013年度の頂花房の平均開花日は、表4のとおり10月24日と、‘紅ほっぺ’より17日、‘章姫’より10日早い。また、頂花房の成熟日(初収日)は11月29日と、‘紅ほっぺ’より20日、‘章姫’より11日早い。

これらのことから、‘きらび香’は極早生タイプの品種であると考えられる。

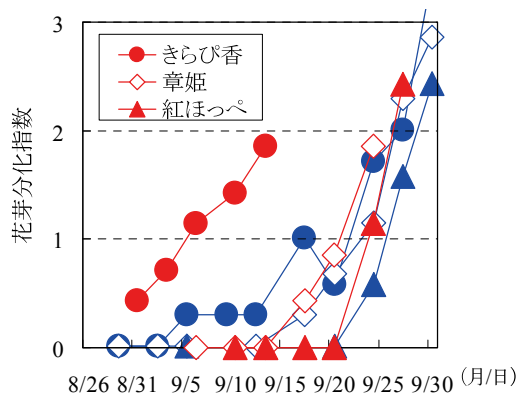


図3 頂花房の花芽分化・発達状況¹⁾

1) ●2012年度, ●2013年度
花芽分化指数を0:未分化 1:分化初期 2:分化期 3:花房分化期とした

表4 頂花房開花日と成熟日¹⁾

品種・系統名	2011年度		2012年度		2013年度		平均	
	開花日 (月/日)	成熟日 (月/日)	開花日 (月/日)	成熟日 (月/日)	開花日 (月/日)	成熟日 (月/日)	開花日 (月/日)	成熟日 (月/日)
きらび香	10/16	11/13	10/21	11/21	11/6	12/23	10/24	11/29
紅ほっぺ	11/6	12/12	11/10	12/19	11/14	12/28	11/10	12/19
章姫	10/22	11/20	11/7	12/14	11/11	12/26	11/3	12/10

1) 頂花房第1果の開花日及び成熟日

表5 第一次腋花房開花日と成熟日¹⁾

品種・系統名	2011年度		2012年度		2013年度		平均	
	開花日 (月/日)	成熟日 (月/日)	開花日 (月/日)	成熟日 (月/日)	開花日 (月/日)	成熟日 (月/日)	開花日 (月/日)	成熟日 (月/日)
きらび香	11/26	1/12	12/10	1/27	12/14	2/5	12/6	1/25
紅ほっぺ	1/2	2/12	12/31	2/11	12/30	2/19	12/31	2/14
章姫	1/2	2/12	1/9	2/18	1/7	2/23	1/6	2/17

1) 第一次腋花房第1果の開花日及び成熟日

表6 第二次腋花房開花日と成熟日¹⁾

品種・系統名	2011年度		2012年度		2013年度		平均	
	開花日 (月/日)	成熟日 (月/日)	開花日 (月/日)	成熟日 (月/日)	開花日 (月/日)	成熟日 (月/日)	開花日 (月/日)	成熟日 (月/日)
きらび香	1/13	3/2	1/21	3/5	1/17	3/14	1/17	3/7
紅ほっぺ	2/2	3/17	2/4	3/14	1/31	3/20	2/2	3/17
章姫	2/12	3/20	2/24	3/26	3/1	3/31	2/21	3/25

1) 第二次腋花房第1果の開花日及び成熟日

頂花房の花数は、表3のとおり2011年度から2013年度の3か年平均で17.1花(概ね10~20花の範囲)と‘紅ほっぺ’の20.6花(概ね15~25花の範囲)より少ない少花数型品種であり、摘花に多くの手間がかからない。

腋花房の開花・成熟日は表5、6のとおりで、第一次腋花房の平均成熟日は、1月25日と、‘紅ほっぺ’より20日、‘章姫’より23日早い。また、第二次腋花房の平均成熟日は3月7日と、‘紅ほっぺ’より10日、‘章姫’より18日早い。

各花房間の平均開花日の間隔をみると、頂花房開花日から第一次腋花房開花日までの日数は、‘紅ほっぺ’の51日、‘章姫’の64日に対し、‘きらび香’は43日と短い。また、第一次腋花房開花日から第二次腋花房開花日までの日数は、‘紅ほっぺ’の33日、‘章姫’の46日に対し、‘きらび香’は42日と、頂花房開花日から第一次腋花房開花日までの日数とほぼ同じである。

これらのことから、‘きらび香’はイチゴ栽培において重要な頂花房から第一次腋花房にかけての連続出蕾性に特に優れると考えられる。

4 収量特性

‘きらび香’は極早生性であるため、年内収量は‘紅ほっぺ’より多い(表7、図4、5)。花数が少ないため花房当たりの収量性は低いですが、3月までの合計収量は‘紅ほっぺ’と同等の収量性を示す。また、‘紅ほっぺ’と比較すると、旬ごとの収穫量の変動が少ない傾向がみられる(図5)。平均1果重では‘紅ほっぺ’と同等の大果性を示すが、‘紅ほっぺ’は3L~2L階級が多いのに対し、2L~L階級が多い傾向がみられる。果房第一果に変形果または乱形果が多くみられ、A階級(16g以上の軽微な変形果)及びB階級(乱形果、16g未満の変形果、8g以上11g未満の正形果)は‘紅ほっぺ’よりやや多めである(図6)。

表7 収量性(10株当たり)¹⁾

品種・系統名	2011年度					2012年度					2013年度				
	年内収量		合計収量			年内収量		合計収量			年内収量		合計収量		
	果数 (個)	果重 (g)	果数 (個)	果重 (g)	1果重 (g)	果数 (個)	果重 (g)	果数 (個)	果重 (g)	1果重 (g)	果数 (個)	果重 (g)	果数 (個)	果重 (g)	1果重 (g)
きらび香	133	2,102	392	6,689	17.1	110	2,292	365	6,562	18.0	29	857	317	5,878	18.6
紅ほっぺ	76	1,516	390	6,725	17.2	35	1,126	351	6,290	17.9	19	602	361	6,539	18.1
章姫	194	2,385	394	5,280	13.4	55	1,224	341	5,092	14.9	22	587	345	4,938	14.3

1) 土耕栽培。普通ポット育苗。7000株/10a。無摘花。年内収量は12月末まで、合計収量は3月末までの8g以上の可販果。

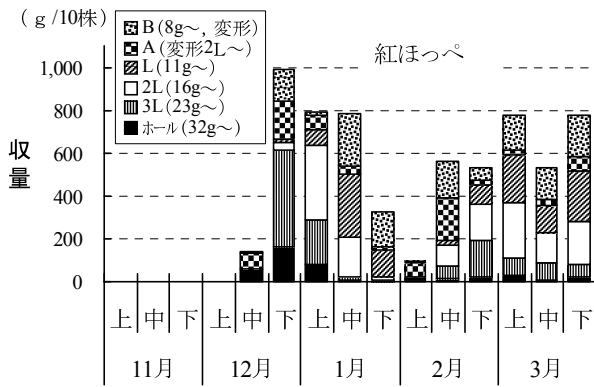
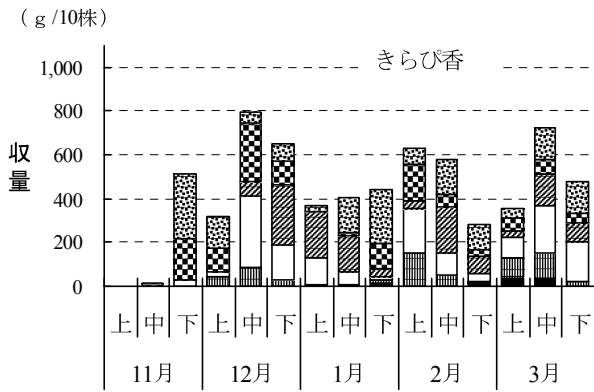


図5 収穫時期別・階級別収量¹⁾ (10株当たり)
1)2012年度. 無摘花. 階級は現地基準に準じた

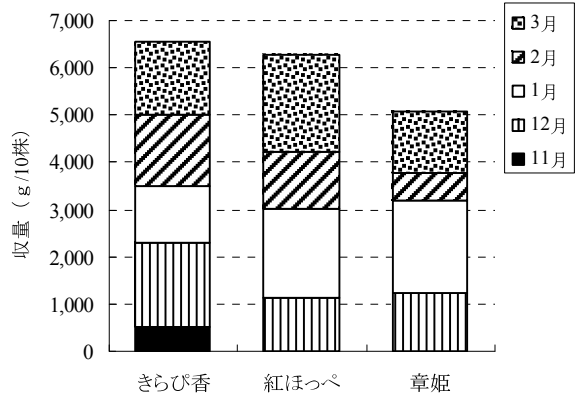


図4 月別収量¹⁾ (10株当たり)
1)2012年度. 無摘花. 3月末までの収量.

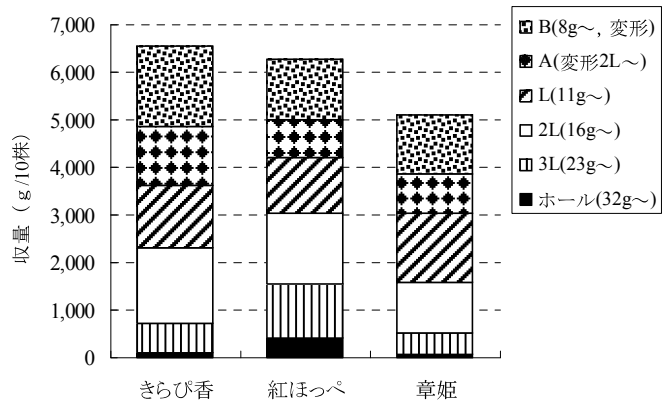


図6 階級別収量¹⁾ (10株当たり)
1)2012年度. 無摘花. 3月末までの収量.
階級は現地基準に準じた

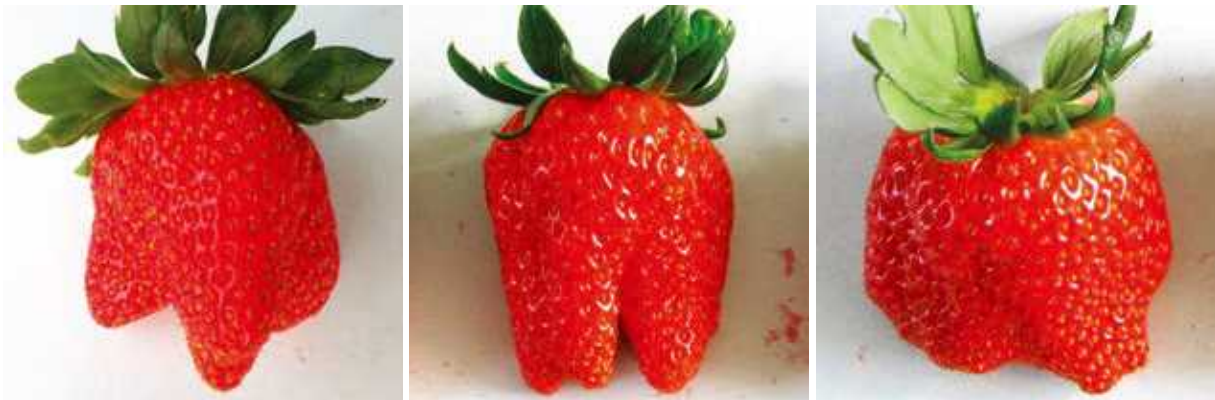


図7 花房第一果の変形



きらび香

紅ほっぺ

章姫

図8 果実の切断面

5 果実特性

果実特性は表8のとおりである。‘紅ほっぺ’同様大果系品種であるが、頂花房及び第一次腋花房の第一果が乱形果になりやすい(図7)。

比重は‘紅ほっぺ’や‘章姫’より小さく、縦横比は‘紅ほっぺ’と‘章姫’の間で、果実形状は縦長の円錐形である。

果皮色は赤色で、‘紅ほっぺ’よりやや薄い。果肉色、果心も淡赤色で、‘紅ほっぺ’よりやや薄い(図8)。

果実は硬く、また、光沢が良好で、食味、香りとも良好である。果実の空洞は、大果であってもほとんどみられない。

糖度、酸度、硬さの2011年度から2013年度の年度別平均値を表9に、2012年度の収穫時期別の推移を図9、10、11に示した。‘きらび香’の糖度は、収穫シーズンを通じて十分着色した果実で9 Brix%以上と安定して高い。

酸度は、‘紅ほっぺ’よりも低く、‘章姫’より高い。このため、糖酸比は‘紅ほっぺ’よりも高い。

果実硬度は、シーズンを通じて‘紅ほっぺ’と同等以上に硬く、果実の取り扱いが容易である。

6 病害虫抵抗性

育成の過程で、直近に病害虫抵抗性に優れる系統を交配親としていないこともあり、また、現地試験での病害虫発生の様子から、特定の病害虫抵抗性は有していないと考えられる。

観察によると、うどんこ病、炭疽病罹病性は‘紅ほっぺ’と同程度とみられる。萎黄病については、現地試験で数件発生が報告されているので、注意が必要である。また、立性であるが葉柄が短いため、農薬散布の際に散布ムラが生じると、ダニが多発する事例がみられる。

7 栽培上の留意点

育苗時のランナー発生時にランナー先端の焼け(チップバーン)が発生しやすいため、少量多頻度かん水を行う等注意が必要である(図12)。

連続出蕾性が強いいため、頂花房出蕾後に第一次腋花房が花房間葉数0枚または1枚で出蕾する場合があります。その場合、心止まりになることが多い(図13)。‘紅ほっぺ’と同様、苗の老化や育苗後期の極端な肥料切れにより発生すると考えられる⁹⁾。また、第一次腋花房出蕾後に第二次腋花房が連続して出蕾し、心止まりになるケースもみられる。

‘きらび香’は果皮が硬いため、種子と種子の間の果皮が裂ける裂皮が発生することがある(図14)。裂皮は、

表8 果実特性¹⁾

形質	きらび香	紅ほっぺ	章姫
果実の大きさ	かなり大	かなり大	大
果実の比重	0.89	0.92	0.94
果実の縦横比	縦長 1.36	やや縦長 1.24	かなり縦長 1.46
果実の形	円錐形	円錐形	円錐形
果皮の色	赤	濃赤	橙赤
果実の光沢の強弱	強	中	中
果実の表面の凸凹の強弱	無又は極弱	無又は極弱	無又は極弱
そう果の落ち込み	小	小	小
そう果の密度	中	中	中
果実からのへた離れの難易	中	中	中
果実の硬さ	硬	やや硬	中
果肉の色	淡赤	赤	淡桃
果心の色	淡赤	赤	白
果実の空洞	無又は小	無又は小	無又は小

1) 品種登録出願に係るいちご属審査基準他による

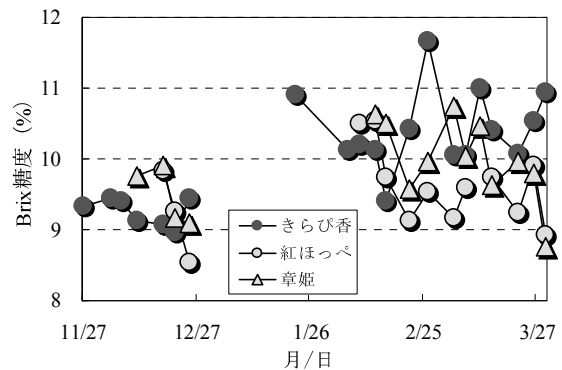


図9 収穫時期別の糖度¹⁾ 1)2012年度

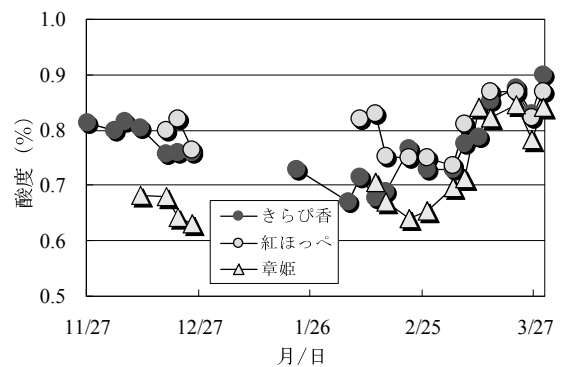


図10 収穫時期別の酸度¹⁾ 1)2012年度

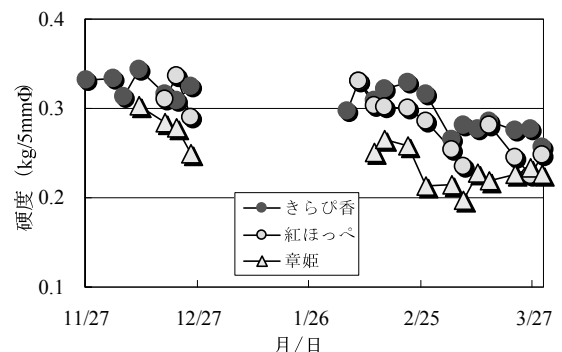


図11 収穫時期別の硬度¹⁾ 1)2012年度

一般的に果皮が硬い品種や系統に多くみられる⁹⁾。現地試験では東西畦の北面等で発生が見られ、成熟日数が長くなったり、葉害等で果皮が硬化するためと考えられる。

2014年度の現地試験等で、頂花房第一果に頂部軟質果(図15)や果実先端が白くなったり果実がまだらに着色する白ろう果の発生が見られた。現地での発生状況から、東西畦の北面や葉陰になる等成熟日数が長くなる場合に発生すると考えられる。その他の要因として、低温、多湿、マルチ面での水湿、窒素過多等が考えられる¹²⁰⁾。

IV 総合考察

本県の主力品種である‘紅ほっぺ’は、収穫開始時期がやや遅い、頂花房から第一次腋花房までに中休みが生じる、3月中下旬に収穫ピークがくる、等時期による収穫量の差が大きく、着果過多になると食味が低下しやすくなる、春先の完熟果で果皮が傷みやすい、等の欠点が見られる。このため、早期から収穫でき、連続出蕾性があり、収穫が平準化されて規模拡大がしやすい品種が将来的に必要と考えた。筆者らは、静岡県気象条件に適し、経営規模拡大の重要な条件となる省力で多様な作型に対応可能で、極早生性及び連続出蕾性を備え、高収量性、優良品質(良食味、輸送性)等の形質を併せもつことを育種目標に交配、選抜を重ねてきた。

ヘテロ接合体であるイチゴの交雑による形質発現は、遺伝子の相加的効果とともに非相加的効果が関係しており、単純な主動遺伝子に支配されている形質はごく僅かと考えられている。このため、イチゴの育種においては、優良遺伝子の集積を図る目的で、優良な形質を併せ持つ品種または系統を交配親に用い、正逆の組合せを行うことが、優秀な品種を短期間で育成するうえでは最も効率的と考えられる⁹⁾。筆者らは現在まで、数多くの組み合わせを実施した結果、古い品種をダイレクトに交配親に用いると古い品種の形質が強く現れることが多かった。一方、新しく育成された品種を交配親に用いた場合は、組み合わせ能力が高い傾向があり、優良遺伝子の蓄積が重要であることを経験している。しかし、当時、極早生、硬果実、良食味という重要な3形質に満足できる品種・系統は存在せず、まず、この母本の育成を行ってきた。そして、これらを満たす‘静岡13号’を育種の蓄積により作出でき、実用性のある品種育成の基盤が整った。

所内有望育成系統同士を交配し育成した‘きらび香’は、極早生性、連続出蕾性、収量性、食味、果実の硬さ、光沢、大果性等について優良な特性があるが、草勢が



図12 ランナー先端の焼け



図13 心止まり株(左側)



図14 裂皮



図15 頂部軟質果

‘紅ほっぺ’と比べやや弱い、発根が‘紅ほっぺ’と比べやや遅い等の劣った特性もみられる。これらは、自殖弱勢の影響の可能性も否定できないと考えられる。栄養繁殖作物であるイチゴは、カンショ等と同じように近親交配により近交弱性がおこることが指摘されている⁴⁰⁾。家畜の改良に広く使われている近親交配の程度を示す指標として近交係数があるが、稲葉ら⁴¹⁾が計算したイチゴの近交係数によると、‘紅ほっぺ’は0.084と低いが、栃木県で育成された‘とちおとめ’は0.261と高く、近年育成された品種は近交係数が高まっているとされているが、0.3程度までであれば、近交弱勢による収量の低下はみられないと結論付けている。‘きらび香’の近交係数は計算できていないが、‘紅ほっぺ’よりは相当高いことが想定され、草勢や発根等について劣った形質が発現したのではないかと考えられる。

このため、近交弱勢を回避しながらイチゴの育種を進めるには、竹内¹²⁾や稲葉⁴⁾、片岡ら³⁾の指摘するように、原種や遺伝的類縁関係の少ない海外品種、循環選抜による育種素材等を導入し、活用することが重要であると再認識した。今後は、短期的には‘きらび香’の欠点を克服すべく育種を進めるが、併せて長期的な視点で、多様な有用形質を持った育種素材の導入を行い、優良な育種母本を育成する計画である。

‘きらび香’の所内試験や現地試験を通じ、早期出蕾、心止まり、裂皮や頂部軟質果の発生等いくつかの生理障害が確認された。これらの生理障害は、‘きらび香’では原因が特定されていない。今後、普及に向けて、これらを克服する栽培技術の確立が必要である。これまで、当所では、新たな作型の開発[†]による規模拡大の可能性を示すとともに、試験データによる栽培マニュアル¹³⁾を作成してきた。引き続き所内試験を実施するとともに、現地で栽培されている生産者の優れた栽培技術を参考に、改訂を重ねながら完成していきたい。

また、試験販売や業務需要への適応性の確認、消費宣伝等、静岡県いちご協議会や静岡県経済農業協同組合連合会をはじめとする関係機関の協力も必要不可欠である。‘きらび香’については、高級路線で試験販売されてきており、市場関係者等からは品種特性である輝き、香り、甘みが高く評価され、特に春暖期の食味、傷みにくさについての評価が極めて高い。業務需要への適応性については、引き続き調査される予定であるが、外観・品質ともに評価されていることは普及に向けての追い風になると思われる。

選抜過程では、多様な作型に対応可能であることも重視している。井狩ら³⁾により、‘きらび香’は様々な栽培

技術の組合せにより定植時期と収穫時期の分散化が可能であることが明らかにされている。栽培面積が年々減少している中、今後、‘きらび香’の導入が進み、労働の平準化により規模拡大する生産者が増えることに期待したい。

V 摘 要

多様な作型に対応可能で、極早生・連続出蕾性を備え、収量性、食味、輸送性等に優れる品種を育成するため、静岡県農林技術研究所育成系統‘05-2-5’を種子親に、同じく‘静岡13号’を花粉親として交配・選抜した結果、極早生性、連続出蕾性、収量性、食味、果実の硬さ、光沢、大果性等に優れた新品種を育成した。育成した新品種は、‘静岡15号’とし、これを‘きらび香’として品種登録出願を行った。その特性は以下のとおりである。

1. 花芽分化は‘章姫’より早く、極早生で連続出蕾性に富む。
2. 草姿は立性で草勢は強く、葉色が濃い。
3. 収量性は‘紅ほっぺ’と同程度に多収である。
4. 果皮は‘紅ほっぺ’より硬く、光沢に優れる。また、糖度は‘紅ほっぺ’と同等以上、酸度は‘紅ほっぺ’と‘章姫’の間で、糖酸比が高く、食味、香りとも良好である。
5. 平均1果重は‘紅ほっぺ’と同程度と大果性を示すが、頂花房及び第一次腋花房の第一果が乱形果になりやすい。
6. 炭疽病、うどんこ病については、‘紅ほっぺ’と同様に罹病性である。

謝 辞

本品種の育成に当たり、静岡いちご戦略協議会、静岡県経済農業協同組合連合会、各農業協同組合、静岡県野菜振興協会いちご部会、静岡県いちご協議会、静岡県農協営農技術員会いちご部会、静岡県立大学岩崎教授、(株)イワサキ経営宮ロマーケティングアドバイザー、齋藤技能長、各農林事務所、県庁みかん園芸課、研究調整課、マーケティング推進課等関係機関の皆様にご多大なるご協力をいただいた。ここに記して謝意を表する。

引用文献

- 1) 赤城博・大和田常晴・川里宏・野尻光一・安川俊彦・長修・加藤昭 (1985) : イチゴ新品種「女峰」について. 栃木農試研報, 31, 29-41
- 2) 伏原肇・高尾宗明 (1991) : 促成イチゴの着色不良果に関する研究. 第 2 報着色不良果の発生に及ぼす環境条件の影響. 福岡農総試研報, B-11, 1-4
- 3) 井狩徹・河田智明・佐々木麻衣・竹内隆 (2015) : イチゴの育苗における暗期中断処理の光強度、光源の違いが花芽分化に及ぼす影響の検討. 園学研, 14 別 2, 407
- 4) 稲葉幸雄・吉田智彦 (2006) : 近年育成されたイチゴ品種の近親交配の程度および近交係数と収量の関係. 園学研 5 (3) , 219-225
- 5) 片岡園・伊東寛史・山田朋宏・野口裕司 (2013) : 循環選抜法によるイチゴ育種素材の作成. 園学研 12 別 1, 329
- 6) 望月龍也 (1999) : わが国におけるイチゴ育種の研究の現状と今後の課題[1]. 農及園, 74 (5) , 539-545
- 7) 農林水産省 (2013) : 平成 25 年産野菜生産出荷統計. http://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/sakumotu/sakkyou_yasai/
- 8) 農林水産省 (2013) : 平成 25 年生産農業所得統計. http://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/nougyou_sansyutu/
- 9) 佐賀県農業技術防除センター (2006) : 「さがほのか」栽培指針. http://www.pref.saga.lg.jp/web/library/at-contents/shigoto/nogyo/nougyougijutsu/honoka/honoka_H18_sisin_.pdf
- 10) 静岡県農林技術研究所 (2005) : 「紅ほっぺ」の特性と栽培技術. http://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/pdf/benihoppe_siryou.pdf
- 11) 静岡県野菜振興協会いちご部会(2015) : 「きらび香」の特性と栽培方法
- 12) 竹内隆・藤浪裕幸・河田智明・松村雅彦 (1999) : イチゴ新品種‘紅ほっぺ(仮称)’の育成経過と主特性. 静岡農試研報, 44, 13-24



図 16 頂花房収穫時の様子 (2013 年 12 月 15 日)

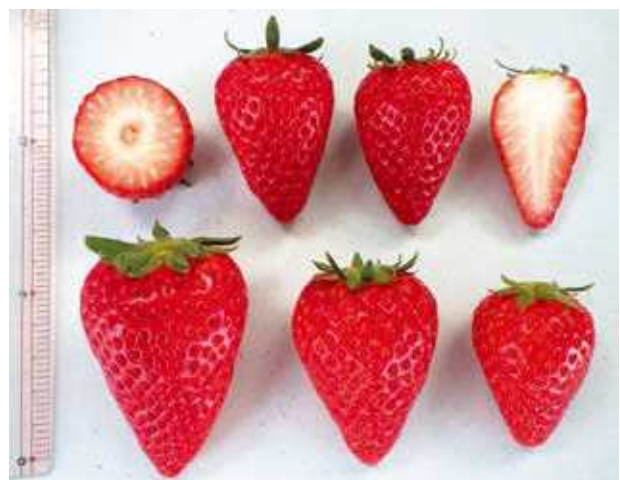


図 17 果実外観と断面 (2014 年 3 月 11 日)